

宛てのない一行は玄界灘に面した宗像に立ち寄って武運を祈願した後、船に乗って辰韓へ向かった。そこには、西海から押し入ってきた日隈・天之国・豊葦原中つ国の面々が一致団結して新羅なる国を構えていた。素戔嗚一行はそこで手厚いもてなしを受けた。

『日本書紀』、「素戔嗚尊の子を、号けて五十猛いまたけと曰す」、

「素戔嗚尊、児の五十猛神を率いて新羅に天降り、曾戸ソシモリ茂梨にまします」

☆ソシモリとは、朝鮮語で牛頭を意味する言葉らしい。

◆やまたい八俣の大蛇オロチ  オロチ大蛇の天照大神・天鹿兎山（天羽羽）親子

八俣の大蛇退治の物語↓素戔嗚が三輪氏（越オロチ族、こおろち小蛇、八色雷神）らの担ぐ天照大神親子を討ち、豊葦原中つ国や倭奴国王朝の建て直しにかかった実話

大蛇退治の実年代↓一八〇年代末

新羅王子の天日槍↓五皇子の一人、熊野クス日（五十猛）

☆天下を覆しにかかった太平道の黄布軍は朝廷軍に鎮圧されたが、その残党が寄り集って勢力を盛り返してきた。地方では農民らが一揆を繰り返し、在地の土豪たちも縄張り争いに明け暮れたことで、漢の天下は有名無実になった。

一八九年、武闘一辺倒で凶暴極まりない董卓が豪族中の豪族・袁紹を押し退けて相国に昇り、朝廷を思いのままに牛耳っていた。この年に、洛陽が董卓の狼藉によって廢墟に化すと、多くの仏僧や信者たちが南の建業（南京）へ走って逃げた。そこで南アジアから流入してきた仏教と交じり合い、建業仏教が盛んになった。

①一九〇年頃、相変わらずオロチ退治にこだわっていた素戔嗚は、新羅王に熊野クス日（五十猛）とともに、日矛など日隈神宝を預けてこう切り出した。

「たった今から、出雲のオロチどもを退治して豊葦原中つ国の建て直しにかかる。ことが成就できた暁には、姉上のかわいがる天神の御子（五十猛）に国譲りして、熊野家を継がせたい。万一ことが挫折した折には、この願いを五十猛に継がせてほしい」  
その決意を見て取った新羅王は、日矛に向かつて次の誓いを立てた。

「彼を天日槍ひびこと命名して、我が王子として育てます。成人の暁には、大軍を預けてみせます」  
☆その後、五十猛が日矛を振りかざして襲来することで、五十猛II天之日矛、天日槍と見た。その際、田心姫は何が何でもこれを果たすべしとして、宗像水軍とともに瑞宝五種、即ち蛇の領巾（浪振る領巾・浪切る領巾・風振る領巾・風切る領巾）・瀛つ鏡・辺つ鏡・玉つ宝二つを五十猛に預けた。

これには、「豊葦原中つ国の女王に立った暁には、五十猛を婿に迎える」との想いがあった。素戔嗚も、天日槍に熊野家を継がせるべく日隈神宝をそっくり託していた。

結局、田心姫の手元に残った祭器は、玉つ宝二つ・八握劍・蜂の領巾・品物の領巾など瑞宝五種、素戔嗚のそれも十握劍と日の像の鏡のみだった。

☆以後も、辰韓と馬韓の国名については、百済、新羅と記したい。それというのも、三国史記の新羅紀年が前漢時代の前五七年、百済国始祖の即位元年も前一八年と伝わっている上に、記紀でも百済・新羅とあるからだ。

②その後、新羅を發った素戔嗚と田心姫らは、宗像水軍と共に瀬戸内海を渡って安芸に上陸した。一行が可愛川をさかのぼって出雲へ急ぐ道中では、倭奴国王朝に恩義ある豪族たちが次から次

と馳せ参じて来て十握剣に平伏していた。一行は彼らも連れて中国山地を踏み越え、比婆山北麓に足を踏み入れた。

素戔嗚一行は籾ひの川を遡って、船通山麓とりかみの鳥髪とりかみ（横田町）の郷に到った。そこで、箸が上流から流れて来るのに気づくと、

「もしや、オロチどもが川上にたむろして居るのでは」と察して、さらに川を溯って行った。稲田という山間に着くと、老夫婦が少女を囲んで嘆き悲しんでいた。素戔嗚がその老夫婦に、

「お前たちは、誰だ」と尋ねると、翁は答えた。

「私は大山祇神の児、脚摩乳あしなちちです。これに控える妻は手摩乳てなづら、娘は櫛稲田姫くしいなだです」  
素戔嗚が「なぜ泣いているのだ」と問うと、翁は応えた。

「私の娘は八人もおりましたが、高志こし（越）の八俣やまたの大蛇オロチ（邪馬台のオロチ）が毎年砂鉄を採りにやって来て一人ずつ連れ去るのです。今年もやって来ました。それで悲しんでいるのです」

『先代旧事本紀』、「素戔嗚、その児五十猛ひきを帥ひきいて、新羅のソシモリの処に天降ります。・遂に埴土を以て船を作りて、これに乗りて東に渡りて、出雲国の籾の河上、安芸国の可愛えの河上にある鳥上の峯に到る」

『古事記』、「我が女は本より八稚女やおとめありしを、この高志こしの八俣やまたの大蛇オロチ、年毎に来て喫くらえり。今そが来べき時なり。故、泣く」

③

☆八俣のオロチは、八頭のオロチ・邪馬台のオロチのかけ言葉だ。八柱の雷神にも通じる。「そのオロチどもは、どのような風体をしておるのか」との問いかけに、翁は答えた。

「彼らは八人の頭の下で、八つの谷でせつせと砂鉄を集め、それを八つの尾根に運んでケラ（玉

鋼のもと)に造り替えています。真つ赤な鉄を見つめているせいか、それとも深酒のせいか、いつも赤い目をしています。たった今、神皇産霊と語る天照大神が親子ともども現場の視察に向いたところですよ」

これを聞いた素戔嗚は、すぐさま命じた。

「ただちに八度醸した強い酒を造れ。次に、家の周囲に垣を巡らして八つの門を拵えておけ。そして、門ごとに酒船を置き、それに酒を満たして待つておれ」

八俣大蛇は酒の匂いにつられてやって来て、酒船ごとに頭を突っ込んで酒をがぶ飲みしていた。やがて、一人二人と酔いつぶれては寝込んだ。素戔嗚は全員が動けなくなるのを確かめながら、十握剣で斬ってかかり、天璽の天叢雲剣とともに天鹿兎弓・天羽羽矢も召し上げた。

天照大神は傷の手当もそこそこに出雲山中から脱して、孫の日子坐王(天鹿兎山の兎)が治める丹後へ落ちて行った。彼はこれがもとで、天神の位も倭王の位も失する羽目になった。

『日本書紀』、「素戔嗚尊、所帯はさせる十握剣を抜きて、寸つだにその蛇を斬る。尾に至りて劍

の刃少し欠けぬ。故、その尾を割裂さきて視みせば、中に一の劍有り。これ所謂草薙劍なり」

「一書に云わく、本の名は天叢雲劍。けだし大蛇居る上に常に雲氣有り。故以て名づくるか」

『古語拾遺』、「天十握劍あめのは「その名は天羽々斬りはきという。古語に大蛇を羽々はという」を以て八

俣大蛇を斬りたまう」

☆天叢雲劍は水天神天照大神の天璽であり、天羽々矢は火天神天鹿兎山(天羽羽)の天璽だ。★づたづたに斬られた天羽羽は、天照大神が向津姫に婿入りする以前に、尾張海部家のハハツ姫との間にこしらえていた児だ。成長すると、尾張海部家を引き継いだ。大乱後、彼は葦原中

つ国をなびかせると、豊葦原中つ国の中興の祖・巖いつのかぐつち香具土や巖かぐつち香来雷の名をもじって天鹿かごやま児山と語った。

★十握劍は、転々と渡り歩いた。

国常立↓ ↓天之尾羽張↓伊弉諾↓素戔嗚↓日神↓素戔嗚↓日神↓高皇産靈↓経津主

↓高皇産靈(天照大神)↓ヒミコ↓火明饒速日↓三輪武甕槌↓磐余彦↓物部氏の手へ渡った後、石上神宮(天理市)に奉納された。

天叢雲劍も、転々とした。

天照大神↓素戔嗚↓日神↓火瓊瓊杵↓ヒミコ↓豊鍬入姫↓倭姫↓日本武の手へ渡った後、熱田神宮(名古屋市)に奉納されて今に至る。

★八俣大蛇退治の物語は、素戔嗚が大蛇の天照大神親子を出雲山中に襲って伊弉諾の仇を討ち、その勢いで豊葦原中つ国の建て直しにかかった実話だ。同時に、古代の製鉄にかかわる伝承だ。

☆古来、出雲と伯耆の境にある船通山周辺は、良質の砂鉄が採れる地として有名だ。付近の谷間や小川には、後世に砂鉄を採った人工の溝、鉄穴流しの跡があちこちに残る。

☆本書では、豊葦原中つ国王朝期の天叢雲劍は細形銅劍、伊都国王朝期のそれは細形銅劍か有柄銅劍、天照大神のかざした天叢雲劍は、荒神谷の銅劍と同じく中細銅劍と見た。

★オロチに関していうと、八人の娘、八俣の大蛇、八頭八尾、八度醸す、八つの門という風に八の数がやたらと出てくる。素戔嗚は三輪オロチが八に縁起を担ぐことで、八づくめにしたのだ。ここから、三輪オロチが八卦を編み出した伏儀の伝統を守り通すのが見て取れる。

☆三輪オロチと縁遠い地の神や水神族の中にも、八雲・八重言代主・八重垣神社・八束など、八にこだわって伏儀の伝統を守ろうとする氏族がいた。おそらく那珂つ国時代の昔から、こ

の一派の先祖が日本列島に住み着いたのである。

④後に、素戔嗚は豊受姫と天葺根（素戔嗚の兄）の二人に、天叢雲劍、天鹿兒弓・天羽羽矢、十握劍を持たせて日神のもとに届けさせた。

「いよいよ田心姫を豊葦原中つ国の女王に、市杵嶋姫も秋瑞穂国の女王に担ぎ出して、豊葦原中つ国の建て直しに取りかかります。出雲平野・安芸・隠岐・因幡をもぎ取った暁には、姉上のかわいがる天神の御子に国譲りして、田心姫の婿に迎える所存です。このことを二つの天璽と十握劍に誓いました」

田心姫もまた、玉つ宝二つ・八握劍・蜂の領巾・品物の領巾など瑞宝五種を豊受姫に託すことで、残る瑞宝を所持する天神の御子（五十猛）が婿に決している、とそれとなく知らせた。結果、日神は三つの天璽を独り占めできただけでなく、倭王や天神の位を揺るぎないものとした。一方の邪馬台国は、速秋津彦（天照大神の義弟）を天照大神の後釜に据えてみたが、失墜した国威を回復するには至らなかった。

◆素戔嗚と大己貴と猿田彦  素戔嗚は出雲熊野に拠点を構え、熊野櫛御氣野と語る。

その結果、二人の熊野櫛御氣野（天照大神と素戔嗚）が存在

素戔嗚嫡子の八嶋手やしまで↓佐太国の嫡子となり、大己貴と僭称

佐太国嫡子の佐太彦（佐ル太彦）↓素戔嗚の嫡子となり、猿田彦と呼ばれる。

①こうして、素戔嗚は熊野櫛御氣野の名も手にして、出雲平野の攻略に乗り出した。その結果、熊野櫛御氣野と名のる人物が二人も存在する事態となった。

☆素戔嗚夫婦が住んだという熊野は、天狗山（古代の熊野山）北麓にある。そこには、熊野

大社（松江市八雲町熊野）が鎮座して、伊奘諾の真名子・熊野大神櫛御氣野命を素戔嗚として祀る。

☆熊野大社は日本火出初之社と呼ばれて、火の発祥神社としても有名だ。

熊野大社で毎年十月十五日に行われる鑽火祭は、出雲大社の宮司が古伝の新嘗祭に用いるひきりうす燧ひきりきね、燧杵を受け取るため、餅を持って熊野大社を訪れる神事だ。対応に当たると、

出雲大社の納める餅の出来ばえについて口やかましく苦情を言い立てることで、亀太夫神事と呼ばれてきた。

②一九〇年過ぎ、素戔嗚は櫛稲田姫を娶って、嫡子の八嶋手をこしらえた。

その後の素戔嗚は力を尽くしたものの、豊葦原中つ国の建て直しに至らなかった。そこで彼は、人を損なうことなく出雲全体を掌握する手立てはないものかと思案しつつ、敵の佐太国と粘り強く交渉していた。その結果、「互いの嫡子を交換して、先ず素戔嗚が豊葦原中つ国の大国主に立ち、佐太国から迎えた皇子が素戔嗚の跡を継ぐ」という和議に漕ぎつけた。

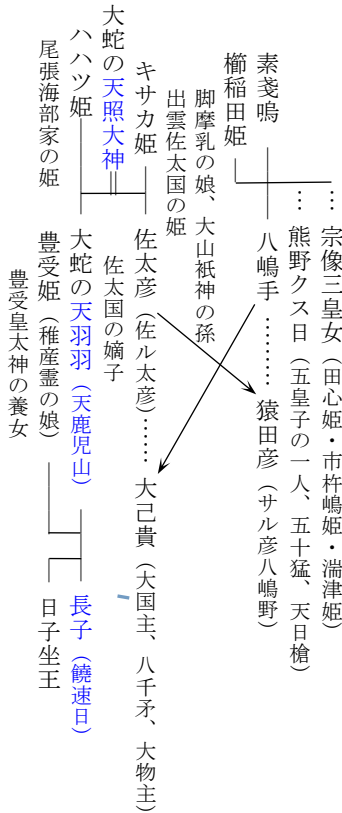
こうして、八嶋手は素戔嗚の家から出て佐太国の嫡子となり、大己貴と称した。一方、潜戸で誕生した佐太国の嫡子・佐太彦が、サル彦八嶋野とも猿田彦とも語って素戔嗚の養子に入った。サル彦八嶋野の名は、佐太彦が八嶋手となった経緯を伝えている。

ところがこの和議は、「姉上のかわいがる天神の御子に国譲りします」という日神との誓約はおろか、「豊葦原中つ国の女王に立った暁には、五十猛を婿に迎える」とする田心姫の想いまで踏みこじっていた。これがもとで、葦原中つ国の後継問題はもつれにもつれて二転三転することになる。

『古事記』、「櫛稲田姫をもちて、隠所くみどを起こして、生める神の名は、八島やしま士奴美神ぬみと謂う」

『日本書紀』、「(素戔嗚尊)、遂に出雲の清地すが(須賀)に到ります。彼処に宮を建つ。・・・、然して後に、素戔嗚尊、櫛稲田姫に生ませたまえる児を大己貴と号す。・熊成峯に居しまして、遂に根国に入りましき」、

☆須我神社(雲南市大東町須賀)は、須佐之男命・稲田比売命・狭漏彦八島野命を祭る。



◆葦原中つ国 大己貴が杵築国の大国主に立ち、東出雲の杵築に再建した国

根の堅州国↓出雲日隈の拠点があった熊野大社・須我神社の近辺  
 素戔嗚が建て直しにかかった国↓豊葦原中つ国

この和議の直後に、佐太国の不満分子が新しい嫡子の下に結集して権力を掠め取った。これに杵築国・聞見国・三徳国が肩入れして、葦原中つ国の囲い込みにかかった。